

ノスタルジー研究の現在と博物館における昭和ノスタルジーのゆくえ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7382

ノスタルジー研究の現在と博物館における昭和ノスタルジーのゆくえ

金子 淳（静岡大学）

1 喚起されるノスタルジー

ノスタルジー^①に浸るということは、誰しも経験があるだろう。学生時代によく聴いていた音楽をふと耳にした時、生まれ育った街に久しぶりに帰った時、同窓会で思い出話に花を咲かせている時、子どもの頃に好きだった食べ物を口にした時など、その当時の懐かしい思い出が次々とフラッシュバックしてしばらくの間ボンヤリする、といった経験も一度や二度ではないはずだ。

これらはごく自然なノスタルジー経験といえるが、いずれも、音楽や風景、思い出話、食べ物といった具合に、何らかの媒介を通してノスタルジーを感じるという点で共通している。他にも、たとえばアルバムの写真、ホームビデオの映像、昔のアニメ、日記、においなど、媒介となり得るさまざまなきっかけが考えられるが、いずれにしても、ノスタルジーを喚起するような事物の存在があつてはじめてわれわれはノスタルジーに浸ることができる。

こうしたノスタルジーを喚起する典型的な場の一つに、博物館の展示がある。とりわけ昔の身近なモノにあふれている民俗系の展示は、ノス

タルジーに浸るきっかけを提供するまさにうってつけの舞台であるともいえるだろう。

一昔前、おそらく一九八〇年代あたりまで、民俗系の展示においてノスタルジーを喚起させる主役は「古き良き農村」であった。かつての農家で日常的に使われていたような農具やさまざまな生活用具を目にした来館者から、「懐かしい」という声があがることも珍しいことではなかった。ところが現在、「懐かしい」とかさやかれるのは、「古き良き農村」の展示ではなく、「ちよつと昔」の都市生活^②の方であり、しかもその「ちよつと昔」とは、端的に「昭和三〇年代」を指す。

都市化の進展とそれに伴うライフスタイルの変化、博物館を訪れる人々の年齢層の変化など、時代の移り変わりを考慮に入れば当然のことだが、ともあれ、ノスタルジーを感じる対象が大きな変容を遂げていることは間違いない。

昭和三〇年代前後の高度経済成長期の事物を懐かしむ「昭和ノスタルジー」は、一九九〇年代半ばあたりからそのブームの兆しが見え、二〇〇五年公開の映画「ALWAYS 三丁目の夕日」や、続く「ALWAYS

続・三丁目の夕日」(二〇〇七年公開)あたりでピークを迎えたようだが、それでも昭和ノスタルジーブームは、後述するように、博物館展示に限らずさまざまな領域やメディアを横断しつつ、ある種のキラークンテンツとして未だに命脈を保っている。

テレビや雑誌で昭和を懐かしむ特集が組まれることは今でもよく目にするし、昭和の庶民の暮らしを伝える書籍も数多く出版されている。学校給食風であることをコンセプトとした商品が売り出され、菓子・飲料では昭和の復刻版パッケージものも人気を集める。なかでも昭和三〇年代の雰囲気味わうという点で大きな力を発揮するのは、空間そのものを再現して「昭和三〇年代空間」を構築しようとするテーマパークや商業施設、街並みの類であろう。

昭和ノスタルジーブームの火付け役とされる新横浜ラーメン博物館(一九九四年オープン)では、日清チキンラーメンが発売された昭和三三年の下町の街並みを再現し、演出された空間でラーメンを提供するというコンセプトが大ヒットする。この成功を皮切りに全国に類似施設を生み出すこととなり、ナムコ・ナンジャタウン内の福袋七丁目商店街(一九九六年オープン、二〇〇二年に「福袋餃子自慢商店街」に改称)や、デックス東京ビーチ内のお台場一丁目商店街(二〇〇二年オープン)をはじめ、各地で昭和三〇年代の雰囲気を全面的に取り入れた商業施設が生まれた。一方、「昭和の町」を標榜する大分県豊後高田市の新町通り商店街や、「青梅まるごと博物館」を推進する東京都青梅市住江町商店街などのように、地域おこしの一環として昭和ノスタルジーの要素が活用されている例もある。

博物館においても、昭和ノスタルジーを積極的に展示に取り入れ、「昭和の暮らし」などと銘打った特別展・企画展の類は引きも切らないし、むしろお決まりの催しとしてすっかり定番化した観がある。厳しい経営が強いられとりわけ来館者の増加を求められている博物館にとって、団塊の世代を中心に多くの来館者が見込める昭和ノスタルジー展示は集客の目玉であり、さらに小学生の郷土学習と連動させれば、小学校の団体見学もコンスタントに確保できるという旨みもあり、昭和の暮らしをノスタルジックに展示するということは、博物館にとって大きな魅力となっている。

しかし、博物館における昭和ノスタルジーの展示をめぐる動向について、筆者はこれまで、その負の側面に光を当て、博物館がこうしたムーブメントに安易に乗り過ぎることによる弊害について批判的に論じてきた[金子 二〇〇七・二〇〇九]。詳細については別稿に譲るとして、その要点だけを示せば、昭和ノスタルジー展示が「貧しくても希望に満ち溢れていた時代」として、ポジティブな側面のみが切り取られて描き出される反面、ネガティブな側面については積極的に触れられることがなく、むしろそれらから目をそらさせる働きをもっていることをまずは指摘できよう。

さらに博物館の文脈においてその問題点を挙げるとすれば、第一に、学術研究の成果として提示されるべき博物館の展示において、昭和三〇年代社会が、その地域性を脱色された上で、「懐かしさ」という要素によって一面的かつ普遍的に表象されていること、第二に、その渦中にいる歴史の専門家である学芸員は、行政改革における集客至上主義の中で、

学芸員個人の内部における研究者としてのさまざまな葛藤とは無関係に、そのブームに「加担」せざるを得ない状況にあること、第三に、昭和ノスタルジー展示が調査研究の蓄積の上に立たなくても展示として何とか形になり、なおかつ集客もある程度見込めるため、このままの状態が続けば博物館の機能の一つである調査研究という「基礎体力」が奪われかねないこと、などが指摘できる。

2 研究対象としての昭和ノスタルジー

ところで、昭和ノスタルジーに関しては、近年、心理学、哲学、社会学、消費社会論、メディア論など、さまざまなアプローチからの研究が増え、なかにはノスタルジーの効用を積極的に位置づけようとする研究成果も報告されている。そこで以下、ノスタルジーに関わるさまざまな研究成果を領域横断的に参照しつつ、ノスタルジーをめぐる知的状況を概観する。その上で再び博物館展示の問題に立ち返り、博物館においてノスタルジーを取り入れることの意味について考察してみたい。

(1) ノスタルジーという研究領域の成立

ノスタルジーについて考える際に、まず参照されるべき先駆的な研究として挙げられるのが、アメリカの社会学者、フレッド・デーヴィスによるものだろう「デーヴィス 一九七九―一九九〇」。デーヴィスの研究は、ノスタルジーを社会現象として捉えた上で、現代社会におけるノスタルジーのありようを社会的に明らかにしようとするもので、ノスタルジーという、それまで日常生活の次元の中で埋没されがちだった身

近なテーマを深く掘り下げることによって、学問や研究の対象に押し上げたことに最大の功績があった。

その議論は、ノスタルジーという概念の歴史的成立過程を踏まえた上で、青年期、老年期を中心としたアイデンティティに対して果たす役割から、芸術やメディアとの関係に至るまで、非常に多岐にわたり、多様な分野における研究の進展もしくは応用への可能性が胚胎したものであった。

ノスタルジーという用語の変遷については、「非軍事化」「脱医学化」「脱心理学化」という概念によってその現代的特徴を説明する。デーヴィスによれば、ノスタルジーはもともと、スイス人傭兵の中で見られた「極度にホームシックな状態」を指して一七世紀に名付けられた医学用語であり、軍隊の中の士気の低下や仮病、脱走、戦闘での敗北など、軍務上多大な損失をもたらすと考えられたために「病気」として見出されたという。一九世紀後半には、ノスタルジーが軍隊や病気の文脈から外れるようになり（非軍事化、脱医学化）、さらに一九五〇年代になると日常的な次元で使われるようになったために精神医学の領域からも解き放たれ（脱心理学化）、肯定的な意味合いを持ちながら日常の話し言葉の中に同化してきたというのだ。

またデーヴィスは、ノスタルジーと過去との関係についても興味深い議論を展開する。ノスタルジーの体験が生じる必要条件是、「良い過去・悪い現在」という明らかな対称が成り立つことであるとし、「現在もしくは差し迫った状況に対するなんらかの否定的な感情を背景にして、生きた過去の肯定的な響きでもって呼び起こす」と定義する「デー

ヴィス 一九七九―一九九〇…二七」。つまりノスタルジーとは、過去を肯定する心情であり、過去と比較して現在の状況や条件に不満がある場合に生じる意識のあり方のことを指すのである。

さらに、過去をノスタルジックに振り返る行為については、「ノスタルジアの体験が持続するための滋養分をどれほど過去の記憶から引き出してしようと、われわれがノスタルジアを感じるきつかけとなる要因は、やはり現在のなかに存在しているはずである」と述べ「デーヴィス 一九七九―一九九〇…一五」、ノスタルジーは単に過去を振り返る行為ではなく、あくまでも現在の価値観のもとで必要な過去を参照するものであると説いた。

デーヴィスは、ノスタルジーとアイデンティティの関係についても重視し、アイデンティティの形成、維持、再構成と深く結びついていることを強調した。ノスタルジーは、青年の依存期から成人としての独立期へ、独身から結婚へ、職業生活から退職後の生活へ、といった人生の転換点、すなわち非連続に対する不安に苛まれるライフサイクルの移行期に顕著に現れるという。同様に、戦争や恐慌、市民生活の擾乱、天変地異といった現象によって引き起こされた社会的な非連続と混乱によってもノスタルジーが立ち現れ、これを「集合的ノスタルジー」と呼んでいる。いずれにせよ、個人的、社会的に何らかのアイデンティティに関する非連続の危機が訪れた時、ノスタルジーは、その連続を確保させるために機能するという²⁾。

(2) ノスタルジーと消費行動

こうしたデーヴィスのノスタルジー研究は、その後、社会学にとどまらず多くの分野に引き継がれ、多様な展開を見せる。特に直接的な対応関係として見出せるのが、消費行動論からのアプローチであり、一九八〇年代に入ると、音楽や映画、スポーツ観戦といった消費行動を、ノスタルジーの観点から捉えようとする研究が登場する。

棚橋豪によれば、ノスタルジー消費研究として成立したのは、ポピュラー音楽の嗜好がその消費者の青年期に決定されることを明らかにした、一九八〇年代におけるホルブルックとシンドラーによる研究からであり、さらに一九九〇年代にはノスタルジーを分析する尺度の開発へと進むとともに、年齢や性別とは別に、ノスタルジー性向と特定の消費財への選好の関係を考察するようになったという「棚橋 二〇〇八」。

一方、デーヴィスによって試論的に展開されたノスタルジーの分類を、消費行動という観点からより精緻化しようとする試みも多く見られ「堀内 二〇〇七」、さらに近年では、たとえば四〇代の子育て世代をターゲットとした自動車のテレビCMを制作する際に、四〇代が懐かしさと感じるような曲をバックに流すという例が典型的に示すように、新しいマーケティング手法として「レトロマーケティング」の定式化が目指されている。

デーヴィスが「現代のノスタルジアについて注目すべき第一の、そしてもっとも目につくことからは、それがまさにビッグビジネスになっていくということである」「デーヴィス 一九七九―一九九〇…一七〇」と述べたように、現在においては、ノスタルジーとビジネスやマーケティング

ングはもはや切り離せない関係となっている「水越二〇〇七」。

(3) 批評される昭和ノスタルジー

ノスタルジー研究のもう一つの柱は、ノスタルジーを醸し出すような文学作品や映画などの批評を通して、その作品において描かれているノスタルジーについて言及するというものである。批評の対象となる作品は多岐にわたり、限られた紙面で網羅的に扱うことは到底不可能であるが、ここではアニメや映画などのポピュラーカルチャーの側に列せられる題材に絞り、とりわけ昭和ノスタルジーが現代社会に果たし得る機能や、過去をノスタルジックに想起することの現代的意味、すなわちノスタルジックな過去と現代との関係性について読み解こうとしているものを取り上げる。

「フィクションナルな過去」という概念をもとに「ちびまる子ちゃん」のノスタルジーを分析した大塚英志は、「作品中のサブカルチャー的固有名詞は具体的な時代を特定するためのものではなく、懐かしいあの頃」というフィクションナルな過去に物語を設定する仕掛けである。この種のレトロ的固有名詞は具体的な時代や体験ではなく、あくまでも無根拠なノスタルジーを呼び起こす符丁のようなものだと見える」と述べ「大塚一九九二・二二二」、この「レトロ的固有名詞」の存在により、「誰もが心地良く懐かしがれる万人向けのノスタルジーの対象を提示した」と指摘する。つまり、懐かしいあの頃」という抽象化した記号を通して、「まる子」の時代を直接経験していない若者でも、ノスタルジーを感じるような仕掛けが施されているというのだ。

物語世界の時代を経験していない若者でもノスタルジーを感じているという点に関しては、映画「となりのトトロ」（一九八八年公開）を題材に分析した吉岡史朗が、次のような見解を示している。「となりのトトロ」においては、特定の年代を指し示すような要素を排除し、「特定の過去という時間的なコンテキストに依存しない」描かれ方をすることによって、個人的・直接的な経験の有無に関わらず懐かしさを感じることにつながっているという「吉岡二〇一〇」。つまり、ある特定の時代や場所についての「リアル」な設定や大衆文化への言及を欠いている」ことによって、作品の「普遍性」が生まれ、それにより「トトロ」の世界が世代を越えた過去の記憶となり得るといえるのだ。そして、宮崎駿が作品を通して提示するノスタルジーについて、「むしろ現在と過去はつながっているということ、単に現代人はそのつながりを忘れていただけだ」という継続の意識」に基づいたものとして高く評価し、失われた過去へ戻りたいというホームシックの念に基づいた「ALWAYS 三丁目の夕日」に代表される「昭和三〇年代ブーム」や「レトロブーム」とは対極にあると位置づける。

吉岡によって「かつての日本の社会が持っていた（と今、人々が思っている）、そして今ではすっかり失われた活力とモラルを懐かしむ、典型的・古典的なノスタルジア」「吉岡二〇一〇：一五七―一五八」と断じられた映画「ALWAYS 三丁目の夕日」シリーズについて、批評家・宇野常寛は、また違った読み方を示す。すなわち、「ALWAYS」で描かれる世界が「負の側面を隠蔽することによって成立する薄ら寒いユートピア」としながらも、「製作者も消費者もそんなことは前提として処理

してファンタジーを楽しんでいる」というのである。「宇野 二〇〇八」。
そして「ALWAYS」は、「自分たちは承知のうえでファンタジーを享受しているのだ」という自己反省ロジックの上に成り立っており、「安全に痛い」レベルの自己反省パフォーマンス」にその特徴があると喝破する。³⁾

(4) ノスタルジー研究の多様な展開

そのほか、昭和ノスタルジーに向けられる研究上の視線は多岐にわたる。都市空間やモノメントと関連づけて昭和ノスタルジーを論じたものに、たとえば、ノスタルジーブームが濃密なコミュニケーションを内包する「下町」という記号と結びついて展開したとする五十嵐「二〇〇七」や、観光地化の空間戦略としてノスタルジーを誘う演出を行うことでその都市空間の付加価値を高めるとする大井「二〇〇四」、明治期以降の近代化を支えた産業遺産である「近代化遺産」を事例に、近代そのものに向けられるノスタルジーについて考察した高岡「二〇〇七」などがある。

また、昭和ノスタルジーブームがいかんにして生じたのかという社会的・歴史的な背景にも関心が向く。グローバル化の波にさらされ、流動化が加速する後期近代において、コミュニティの理念が魅力を持つようになり、こうした過剰流動性に耐えられない個人が吸い寄せられたのがノスタルジーブームであったと分析する五十嵐泰正は、コミュニティ願望の世界的高まりが、日本社会においてポピュラー文化に発現した一形態だと指摘する「五十嵐 二〇〇七」。

さらに、浅岡隆裕は、昭和についてのメディア上での語られ方とそれへの社会的な反応過程に注目し、「昭和三〇年代」をテーマに取り上げるメディアやイベント、展示などの作用により、「精神的な豊かさがあった昭和三〇年代」という語りが構築される過程を丹念に描き出す「浅岡 二〇一二」。「昭和イメージの語られ方」については、昭和三〇年代に対する見方(肯定的/否定的)を縦軸に、現代社会に対する価値付けとの関連(関連あり/直接の関連や言及なし)を横軸に取り、昭和三〇年代に関するメディア上の語りの布置関係を分析した浅岡「二〇一二」のほか、新聞記事データベースを使って「昭和三〇年代」の言及記事数を調査した寺尾「二〇〇七」や、大宅壮一文庫の雑誌記事検索を使ってその傾向を描き出した市川「二〇一〇」などがある。これらは、同時代的なメディア表象の問題を扱う社会的なアプローチによる成果といえよう。

一方、民俗学においては、「フォークロリズム」への関心と重なり合いながら、ノスタルジーを考察の対象としたものが登場する⁴⁾。また、民俗学のあり方とノスタルジーの関係について検討した川田牧人は、民俗学を「ノスタルジーの学」とする小松和彦の言を引きつつ、民俗学が「絶対的過去を対象とするのではなく、現時点に対する相対的過去としての「ちよつと前」を対象とする」ことの意義を説き、一人の人間が語りうる記憶はだいたい五〇〜六〇年が限度であるから、「おおよそ半世紀前までの生活習俗の記憶を掘り起こすことが、民俗学の主要なターゲットとなる」と論じた「川田 二〇〇六」。さらに川田は、ノスタルジーの語り、過去のある状態に回帰することを目的とするのではなく、将来を創造する指針になるとして、その効力を肯定的に評価する。

(5) ノスタルジーの効用

川田の提唱するようなノスタルジーに積極的な効用を見出す議論については、臨床心理学におけるノスタルジー研究の進展とも関わっている。アメリカの社会心理学者、ゲバウエルとセディキデスによれば、サウサンプトン大学における種々の実験や調査を通して、ノスタルジーが「人々が悲しみや孤立感から立ち直るのに役立つが、それだけでなく、懐かしく素晴らしい記憶は、先々に生じるひどい気分を予防するワクチンになりうる」と結論づけた『ゲバウエル・セディキデス二〇一一』。

こうしたノスタルジーに関するポジティブな効用を見出す心理療法として、近年では高齢者を対象とした「回想法」が注目されている。「回想法」は、一九六〇年代にアメリカの精神科医ロバート・バトラーによつて、老年期の回想や人生回顧を高齢者の心理臨床に位置づけられて以来、実証的な研究や実践例が蓄積されてきた。それまで過去に執着する否定的な行為として捉えられていた高齢者による過去の回想行為の意味を捉え直し、人生経験を話し合うことによつて記憶や思い出を回復させることが、高齢者の日常生活の活動性や関心を高めるだけでなく、認知症高齢者のコミュニケーション活動を促進させ日常生活行動の改善にも効果があると指摘されている〔森川 一九九九〕。

こうした回想法の実践の場として、「懐かしいモノ」にあふれる博物館が注目されるようになり、とりわけ「昭和日常博物館」を標榜する北名古屋歴史民俗資料館による「思い出ふれあい（回想法）事業」の取り組みが広く知られている〔市橋 二〇〇四〕⁵⁾。

3 博物館における昭和ノスタルジーのゆくえ

(1) 残された課題

以上、いささか迂回的ながらノスタルジーに関する多様な研究状況を概観してきた。その過程で、昭和ノスタルジーに限ってみても、どこに議論の軸足を置くかによつてその評価が大きく分かれ得ることも確認された。

だが、ノスタルジーそのものについてまだまだ明らかになっていないことも多い。たとえば、その時代を直接経験していない若い世代も懐かしいと感じる意味については、そのメカニズムを含め、この問題に関する明確な解釈はまだまだ現れていない。

このことについて、消費行動論からは「歴史的ノスタルジア」という概念によつて説明しようという動きもある。「歴史的ノスタルジア」とは、「生まれる以前の古き良き時代の、歴史的物語や歴史上の人物への感情移入によつて生じるもの」を指すが、堀内圭子によれば、歴史的知識がノスタルジックなものになるための条件は十分に解明されていないとし、たとえば「年表を眺めていてもなかなかノスタルジックな気分にならない」ことの意味を問う必要があると指摘する〔堀内 二〇〇七〕。本稿の関心に引き寄せれば、具体的な固有名詞を伴う描写が「歴史的ノスタルジア」を喚起し得るのか、それとも逆なのか、という課題設定が可能となるだろうが、個別の事例を少しずつ積み上げながら検証していくしかないだろう。

博物館の展示にノスタルジーを取り入れる時よく使われる手法に、たとえば白黒写真をあえてセピア調にして展示する、あるいは展示室の照

明を暖色系にして夕焼けのイメージに近づける、などがある。そして実際にこうした手法はかなりの程度、ノスタルジックな演出として効果をあげているようにも思われる。しかし、こうした演出の背後には何か共通の法則が存在しているのか、あるいは、法則が複数存在しており、それらのうちのいずれかを備えた刺激に接するときノスタルジーを感じるといふ共通の反応をするのか、といった疑問が提出されているもの。「堀内二〇〇七」、これも解明はされていない。つまり、ノスタルジーのメカニズムや機制はまだよく分かっていないことが多いのだ。

現在の博物館が、明確にノスタルジーの要素を取り入れた上で演出するようになってはきているが、実際には、経験上その効果が認められると考えられている手法が採用されるというものであり、理論的な根拠や裏づけが必ずしも問われることがないというのが現状である。

(2) ノスタルジーによって不可視化されるものへの想像力

現在の昭和ノスタルジーの直接体験者としてブームの中核を担っている団塊の世代は、いずれ年老いて社会的に退場していくことになる。つまり昭和ノスタルジーは、遠くない将来、確実に、直接体験者ではない人々の間で享受される「歴史的ノスタルジア」としてのみ生き残ることになる。したがって、昭和ノスタルジーブームの終焉後を見据えたノスタルジーのあり方を、正負両面の意味を含めて冷静に捉え直す必要性が生じてくるだろう。

近年では、博物館にとつての新たな「救世主」として「回想法」への注目が集まり、その取り組みも拡大している中では、今後、昭和ノスタ

ルジーという領域を越える形でノスタルジーそのものの要素が博物館の中でより重要な意味を持つてくることになるはずだ。

さらに、「回想法」への関心の高まりと相俟って、ノスタルジーのポジティブな効用を積極的に見出し、こうとする傾向が強まっていくことも予想される。しかし、博物館においてノスタルジーへの過剰な適応がこれまで以上に進行していった場合、その効用が前景化されることによって、それと引き換えに後景に退いてしまうものへの想像力が失われていくことにはならないだろうか。

このことについて、映画「千と千尋の神隠し」(二〇〇一年公開)におけるノスタルジーが「〈新〉植民地主義」を隠蔽することにつながっているとする禧美智章の問題提起は、重く受け止める必要があるだろう。「千と千尋の神隠し」の「不思議の町」をめぐる旅として、台湾の九扮へのツアーが人気になっているという現状について、禧美は、「不思議の町」が日本的なノスタルジーを醸し出す風景として受容される一方で、公式情報において「不思議の町」のモデルが江戸東京たてももの園の看板建築や新橋・有楽町の歓楽街とされているにもかかわらず、景観が似ているとされる実在の台湾九扮に足を向かわせていると指摘する。そして、九扮の風景を見て「物語世界と同じだ」と感動した観光客が、日本と台湾の歴史的な関係を自覚することなく、「日本が台湾を統治していた時代」を彷彿とさせる台湾の街に「日本統治時代のノスタルジー」を抱いている現状に警鐘を鳴らしている「禧美二〇一〇：一三七―一三八」。

さらに禧美は、映画監督・押井守の「あの時代にノスタルジーを感じさせるといふ行為自体が虚構の現代史であつて、あの時代に対する清算

をうやむやにするだけ。清算も終わっていないのにノスタルジーにすり替えているんですよ。僕の立場からすれば、ノスタルジーは虚構の現代史をつくる方法論に過ぎない。歴史を忘れさせるための装置「歴史の忘却装置」なんですよ」という言葉を引いた上で、「ジャパニメーションという語で「へ新」植民地主義」的なまなざしを見えにくくしている」と糾弾する「福美二〇一〇：一三八」。

博物館がノスタルジーというフィルターを通して、歴史、とりわけ近現代のセンチティブな過去を表象する際、ノスタルジーの持つポジティブな効用だけに目を奪われてしまうと、そのフィルターの作用によって霞んで見えなくなってしまうものもある。ノスタルジーの効用を最大限に信頼して実践に應用させるといふ意欲や努力そのものは適切に評価されるべきだろうが、それだけではあまりにもナイーブすぎる。もちろんノスタルジーを喚起させる演出をすること自体が悪いというわけではない。問題は、その行為によって不可視化されてしまうものへの想像力をいかに確保し得るか、ということだろう。そのためにも、博物館において提示されるノスタルジーというまなざしのありようについて、常に自覚的になっておく必要がある。

(かねこ あつし)

注

(1) 社会科学のタームとしては「ノスタルジア」という用語が使われることが多いが、英語読み(nostalgia)かフランス語読み(nostalgie)かの違いだけで、意味は同じである。本稿では、原典の引用箇所以外、一般的な用法としてフランス語読みの「ノスタルジー」という言葉を

用いるが、特段の意図があるわけではない。

(2) しかし、アイデンティティの視点にとらわれすぎることにより、多様な現象をすべてアイデンティティに結びつけて解釈してしまうという批判もある「石井二〇〇七」。

(3) 浅岡隆裕は、新聞の投書欄における昭和的なユートピアとの親和性を感じさせる投稿の分析を通して、「本人たちの無自覚さ、無意識さゆえ、一種の盲信に近い対象の距離関係を形作っていく」とした上で、宇野の見解に対して「果たして観客はどのように自覚的であったといえるだろうか」と疑義を呈している「浅岡二〇一二」。

(4) 日本民俗学会が学会誌『日本民俗学』において「フォークロリズム」に関する特集を組んだのが第二三六号(二〇〇三年)であり、その特集号において青木「二〇〇三」と矢野「二〇〇三」がノスタルジーを考察の対象としている。

(5) 『博物館研究』誌では、二〇〇四年に「博物館における高齢者学習支援」という特集を組み、北名古屋歴史民俗資料館(掲載当時は師勝町歴史民俗資料館)だけでなく、各地での高齢者に対する博物館の取り組みを紹介している。

文献

青木俊也 二〇〇三 「昭和三十年代生活再現展示とノスタルジアにみるフォークロリズム的状况」『日本民俗学』二三六

浅岡隆裕 二〇一二 『メディア表象の文化社会学——昭和イ

メージの生成と定着の研究』ハーベスト社

五十嵐泰正 二〇〇八 「ノスタルジー・ブームと〇〇年代の「下

町」『社会学ジャーナル』三三三 筑波大学社会学研究
究室

石井清輝 二〇〇七 「消費される」故郷の誕生——戦後日本のナ

シヨナリズムとノスタルジア』『哲学』一一七 三田
哲学会

市川孝一 二〇一〇 「昭和三〇年代はどう語られたか——昭

和三〇年代ブーム」についての覚書』『マス・コミュニ
ケーション研究』七六

市橋芳則 二〇〇四 「師勝町」思い出ふれあい(回想法) 事業」

の展開——回想法を用いた博物館の高齢者支援プログラ
ム』『博物館研究』三九(五)

宇野常寛 二〇〇八 「昭和ノスタルジーブームの諸問題——歴

史とどう向き合うか?』『SFマガジン』四九(四)
早川書房

大井真輝 二〇〇四 「レトロ空間」への注目みる都市空間の

今後の方向性についての検討』『社会学研究科年報』
一一 立教大学大学院社会学研究科

大塚英志 一九九二 『仮想現実批評』新曜社

金子 淳 二〇〇七 「博物館の「危機」と歴史展示——懐かし系
ノスタルジー系展示から見る歴史系博物館の課題」『歴史

学研究』八三八 歴史学研究会

金子 淳 二〇〇九 「昭和ノスタルジー」という思い出』『歴

博』一五二 国立歴史民俗博物館

川田牧人 二〇〇六 「伝承知識とノスタルジー——「よりよい暮
らし」の語り口」『中京大学社会学部紀要』二二(一)

J・ゲバウエル, C・セディキデス(「別冊日経サイエンス」編集
部訳) 二〇一〇 「ノスタルジーの効用」『別冊日
経サイエンス』一七八 (JoChen Gebauer, Constantine

Sedikides, 2010 "Yearning for Yesterday", Scientific
American Mind, July/August)

高岡文章 二〇〇七 「近代とノスタルジー——近代化遺

産と昭和ブーム」『福岡女学院大学紀要 人文学部編』
一七

棚橋 豪 二〇〇八 「ノスタルジアと消費社会——その類型と動

的側面について」『奈良産業大学紀要』二四
F・デーヴィス(間場寿一・荻野美穂・細恵子訳) 一九九〇 『ノ

スタルジアの社会学』世界思想社(Fred Davis, 1979,
Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia. The
Free Press)

寺尾久美子 二〇〇七 「昭和三〇年代」の語られ方の変容」

『哲学』一一七

堀内圭子 二〇〇七 「消費者のノスタルジア——研究の動向と
今後の課題」『成城文芸』二〇一 成城大学文芸学部

水越康介 二〇〇七 「ノスタルジア消費に関する理論的研究」

『商品研究』五五(一・二) 日本商品学会

矢野敬一 二〇〇三 「ノスタルジー／フォークロリズム／ナ

シヨナリズム——写真家・童画家・熊谷元一の作品の

受容をめぐる」『日本民俗学』二二六

森川千鶴子 一九九九 「重度痴呆性高齢者のグループ回想法が

QOLにもたらす効果」『看護学統合研究』一(二)

広島文化学園大学

吉岡史朗 二〇一〇 『『となりのトトロ』に見る「なつかしさ」

と「ノスタルジア」』日本思想史懇話会『季刊日本思想

史』七七 ペリかん社

禮美智章 二〇一〇 「アニメーションと〈新〉植民地主義——ア

ニメーターの搾取構造と東南アジアへのまなざし」

『立命館言語文化研究』二二(三)